太田道灌雄飛録

三

遠
2510
6-3

遠
門號 2510
卷 6-3

帝國圖書館藏

太田道灌雄飛録卷之三

目録

一千葉落城亂直父子生害のゝ事 千葉二流となるゝ
一太田持資家督相續扇ヶ谷を補佐もるゝ
一太田持資武州豐嶋郡に城を築くゝ事 五山の學者詩文を贈るゝ
附 河越の城を移もるゝ
一東の常縁京都の命によりて下總國へ下るゝ事 馬加落城のゝ
附 東國の將士所々蜂起のゝ
一足利成知東國の主として下向のゝ

述懷の奇偶しるとこ

原持資

君にかき民のゆ世に朝ぞに

つくしとつ男性おそ世きさ

太田道灌雄飛録巻之三

東都　木村梅年忠貞編緝

○千葉落城胤直父子害死の事　千葉二流となる事

こゝふ又千葉氏胤直が家長よ。原越後守流房同氏越後守流氏。国府寺下野守貞胤といふ者あり。世ふ有勢の名ありて。中ゆも石浦房ハ武功の誉ふく。所領あゞも其主千葉より多くなりて関東の千葉。千葉の原とゝひ〳〵とぞ。扨胤房ハ陸奥ゝ仕せ〳〵ゝ。成氏ゝり胤房と頻よ市類ゝあるゝ。胤房市所の功績ゝも殆上ゝく。千葉氏胤直よ移ゝ初ゝく。市所方ゆゝりのゝくゝゝ。又国府寺下野守ハ上杉ゝりかゝゝつゝゝれば。同ゝの者代りよ。流ゝ。胤直ゝゝ市所を疎ゝみゝゝ。千葉父子兄弟ゝ

上杉に合躰して御所方を背きたる原胤房よりしく我が領分をもちひざる胤直君臣の義ハ是までなり。其の義あらバ思ひ知らせ申さんと。密に成氏へ内加勢を乞ひけれバ。一戦に討亡しゆへんと申しけれバ。御所方よりも加勢を遣さる。胤房大に悦びく。同年三月廿日千葉の城へぞ押寄せたり。胤直城の中に籠りたりしが。然れども多勢に手もあらしバ。いかんともせん方なく。千葉の城を没落して同国多古。志摩の二城に楯籠る。一味の兵を催して上杉の加勢を待てぞゐたりける。然るに故千葉大介満胤が二男よ。馬加陸奥守康胤入道常輝。其の子三郎胤持とりよりのありし是又兼てより御所方に志ありたれバ。父子共に討て出。成氏の御味方申し。原胤房にあひかゝる。越後守大に悦びて。是に大将として。多古の城へさし向け。胤房ハ志摩の城へ押寄せて。息二ツ三ツに攻寄る

城へ向ひたる馬加入道ハ古兵にてありければ。城をとりまきて兵粮の道を止て。一方をバわざと明けて攻めたれバ。城兵ども糧に乏しく。ぬけぬけに落行けり。城将千葉二郎胤宣ハ若年といひ。殊に無勢なりしかば。二十騎計にて逼ざりしが。戦ふ勢ひもなく。討死せんよりハ潔く自害して首級を御父の道胤へ参らせんと。則ち乳母子圓城寺藤五郎直時をもつて敵陣へ申遣しけれバ。城をあけわたしけり。仏前にて切腹せんとて城を出ければ。寄手並びに御所方の加勢の兵ども。是を送りて城下の武佐といふ所なる。阿弥陀堂のありけるまでぞ送りける。斯くて胤宣ハ心静かに仏に向ひて唱名し。料紙硯を乞ひて

し書綴り清くいさぎよく肌おし拭ぎ腹一文字よかき切るべ固城る義
之命。とぶめるる流とおもくて苦痛いたずらと力の猶し。逆と力の後ろ切
なのもと喉へ突き通し綴りぬぎ要られてぞ死しうるこまとえと流宜
小弥次郎しまりし。椎名子十郎流家。本内義十郎。宗城る之義。米井義之。
栗飯原九郎。池内勘十郎。深山弥千郎。寺本長八。青野彦九郎。多々田孫八。
高田源八。三谷新十。寺本弥七中村五四郎。本多遠くく。拓とたりくべて郎
さうるふこまとよりて首級をとり拓せ氏八逆よりて。嗚呼惜いる義二郎
流宜十三年十月十四日。武勇もの備りしが不憫の
軍起るく。享徳四年八月十二日之従もふ秋風のさりよきえ切くもら
露社あえと武佐ふぞりくける。世堂の別当来聖院荒俗と得ず
蔵経焼香しく。実後のつあ懇ふぞ彼しうきり。さて之志麻乃

流へ。原越後守大将とありく。昼夜とうくふと攻めさうしぶ。四年八月
十四日の夜彼よかるるべ攻落されもち稿とうるくひき。如来堂の
別当東覚院より発る。別越後守流とうけ元彼手成失くくとうさ。流
直ぐ側近くまづ之上鶴女房とはねくくやもるん。氏之
ひるふて。討の者さく越されひ人でよれひ中くう新くかみよびを也。
義之流宜のひるへ。最初うち一所くさみもこまるく。何の不義もおろく
おさべ馬かくのひる不後ふみぼくるひ。ゆもくひ今と助け義くせひん
との義ふゆさと。彼女房涙あべくる義あへちやちぬる十二日。内生宮有
しさそれべよう弓曳く越後守。そべろふ流と流くり。明ると八月之宮
あのまべくよ重て。如来堂氏稲麻行葦く追元巻さ国の芦もべ揚り
る。千葉胤直入道常陽介義秀中務入道千心国村ふ後と切るべ。池内豊後守

亂相交錯して切腹せ。園城寺国懐る。本国左衛門尉。池田義人。多田伊豫守。
要脇ホ左衛尉。る国中勢至流沙等へ。亂世の奥方うゝびふ上龍紙如あ。
女房達さゝ〜殺〜ろひくゝよ抜きとりくも悪なり。別者忠
覺院死骸を集ら。佛事供養紙あ〜毎常の煙と焼上るふ。ふる亂後
守流義い。さゝめても年頃の恩をば忘りゝものそと。遺骨を千葉乃
大日寺よ教〜ま ねあ。五輪の石塔ちて立きる。敵ゆゝも諸代うまくふ
ましあるふ昂ひきるへ晴あゝ人と感じ〜りしぞ。こゝゆみあゝれれる
事なり。下総の金剛授寺北僧。中納言の坊ゝて〜いと美き者あ。能
書の聞えなりゝ。二郎亂宣ぶ推き酒ゝりのふあひ乃師めて有名れ。
亂世足よゝもに自害のゝ〜を供く笑追善の為ゝ如来堂ゝ建ゝ。
ふ〜ゝ焼香念佛せ。その時別書東光院生今ゝ〜く。亂世ゝ〜ゝ最後

躰とりの歌ゝ。辞世の歌ゝとゝ〜ゝて彼ゝ〜ゝ〜ゝ。中納言
安歌ゝ数遍吟じてみる涙とゝ〜 拭ひその後佛義人ゝ。ゝ堂の
一首の歌ゝ書つけて出ゝきるふ。迎ゝ道乃川水の深き所ゝ〜ゝ
つひふ空〜くゝゝりゝ長歌ゝ。

ゝるもし義ゝ〜ゝゝ苦ゝ〜ふ〜ふ〜ふ人ゝゝゝ
下総の国ゝ〜ゝ桓武天皇ゝ代。上総介平良兼ゝ末葉ゝ。元和年間 下総
介ふ猶経ゝ〜ゝ。ゝ千葉介ゝ〜ゝ。ゝ朝ゝ人ゝ二の忠義ゝふ
ゝゝ。ゝと高ゝと重ゝ〜ゝ家ゝ。宿加階ゝ〜ゝ〜ゝ。ゝゝゝ家の上ゝ
ゝ〜ゝ。ゝ〜ゝ亂ゝ。二男ゝ相馬の家ゝ継ゝ。相ゝ小二郎 師常ゝ〜ゝ。三
男武石二郎流ゝ。四男大須賀四郎流ゝ。五男国府の郎流ゝ。六男東六郎
流ゝ。ゝゝ従五位下ふ叙ゝ〜ゝ。ゝて六郎ゝ〜ゝ。ゝ東の郎三十二郎

と頌し寿通とりつく其石をすゑ。始めより葉中ふるされこれを孫代々大日
勧住と。常流より代々時流と号す。左孫衆の長幸をもつて。杉流の
綱列小金より住す。馬橋より大日寺代建立す。頼流の子宗流。宗流の子真流
の子紀氏幸代千葉へ移さるれども大日の縁へ移世より代々幸る。真
流その子氏流も小嘗不より住せり。附。夢想国師の弟子。北尚代請
じて此寺の中興開山。これをするのち今の万満寺なり。宗流へ三井
寺ゆく付元。真流へ宮方ゆくあり。北国落ちて新田義貞ふ
屠してあり。るが。ゆゑ氏の味方とする。宗流の一男流貞へ宮方ゆて
下総のゆゑより殘る。此人乃子日祐上人へ法華宗の業を受て。同国中と
法華経寺の中興開山。さるより流貞より中山へ堂建立あり。七
五重乃塔婆を立る。その後流貞より溶して。吉野乃皇居へ参り。征西

将軍の宮。流業へ下向乃由供して九州へ下る。大隅守より任せ。是肥前
の国へも知行。もつて日祐も九州へ肥前国相模へ建立して。中山
きまの世すぐる。世弟と中山。一寺とあるとそ。是より
貞流の子氏流。千葉へ移す流直すで代々。その氏の願ゆゑ流と
宮方ゆゑ方とて。ひつ。ゆゑ方へ方へ下る。流へ同国中と
一統あり。人々ゆゑ馬加康流へ道師所方とあり。原の一族ども へ道
を立と。千葉へ移す。家ゆゑ。是より系も小金の城へ居住す。
かゝ。ゆゑより移方よりも。人々ゆゑ兄流也。同。対せ。中務へ道了
名の子息。左京実流。二郎貞流のあるゆゑ。下総国市川の城へ住す。
名乗べ。千葉の四郎あり。ひくふあるゆゑ。二流
とぞあるふ。

圓城寺藤五郎
千葉小二郎胤宣

胤宣ゞ郎等
千葉小二郎胤宣
生年十五才多胡の
城に籠り伯父ゝ加
入道よ責られ落城し
空弱よ和歌を詠て
生害ゝる図

○太田持資家督相続扇谷氏補佐する事

爰ゆえ古田備中守資清入道道真いにしへぬる享徳三年甲戌より扶も尾とも申す所方と鴻河原よりみいて励くたくひ。味方を救ひ参らせども。上杉方敗軍〳〵上野国白井へ引退きぬれば道真も河越へ引きそのの後へ不参とやうやく出陣あり。寄せ手の兵粮を貯え軍士共練てぞ居うりくふぶとなる恩源古市持資なり二十四歳なり。道真あるを日持資を宗匠へ寄せ移きくなさ居うへ。我つ〳〵賞時の形勢を観察するに。その徳をしたひ。臣の節を効る。是源平の昔よりかく〳〵ぞと〳〵。年〳〵人その信義守〳〵ぞと。国家乃衰微ぞとよう大のある事なり。其源へ持氏卿の京都の命をもちひ申わざるゆえにて。又長棟養子乃持氏今の古ぞと申奴あり。也棟実よ忠あ〳〵べ。持氏今の弟申者。ひるみの内をもつて今嗣とせ

べ。眼くのへわどの事へある所ど。かく〳〵其者も隠遁せ〳〵まべ。ほの道とたくさともりへ居きる。秋ふ代君の不義をなく〳〵て。京都の大軍を〳〵出〳〵。これよ今して持氏今よ出せ書させ申せ〳〵。編よ也棟の胸臆とり出るのあ〳〵ぞや。さまべ一族の亮中へ過ちなるあるよ。成氏の出敵を頼ひ〳〵。其罪を責へゆ〳〵。敬恵〳〵ひがさかん。すく成氏ゆき嫌金の沛所へ作ぞ申〳〵。とも上杉ぶ〳〵〳〵せ〳〵るれば眼〳〵へ眼〳〵恩義へ又冥〳〵ぞとべき不ぞり。さる代義者武へ上杉を嫉ひ申〳〵ぞ言代へ。一時よ憲忠を害〳〵申〳〵。大乱を国称〳〵の根元よあ〳〵ぞや。上杉方何ぞ乱を治めて〳〵ぞ見るべきぞ。の〳〵後へ人情淋〳〵ぞ踏〳〵。朝よ伊勢方し申也も久へ怨上杉へ恨を捧〳〵。反覆ひ〳〵ぞ摸稜の手とあまり。今美英雄其間へ起り。両虎お争〳〵へ弊よ象ぞべ腑を噬もかへ〳〵し。成氏ぞ

東國を平治して鎌倉に統さの君よりあるべしと擬えて八方を望むふ
るも。七穂の先徴あり是ぞ我屋を興すべきと雖数代上杉の
家長にて立家の盛衰敵を敵にそのまゝ國々乱きふあるべし今面目と思つて
龍居日久しく時八年まる戦待るのみ此頃市郎兵へ孫金殘退きて古河
に移住しぬべし長尾入道とも謀り合せ古河の城へ入りあるとなり。汝ぞ
こゝへ如何と問ひくるゝ。拙資父の領地なれば行の勢ひ為ふ為りてゆひ給ふ
ふ世の人一つの憂ひあり。今上杉家山内扇谷合戦の景願ひ市郎方上
杉しおゝ方をて合戦隙なくまべ。お互に婚姻をあるべ。此度のろひふあと
とらんぐも如何市郎方裏へ歸を潜るろとふ至べ。又同流確執のとしる
顯然なり。されば山内殿方扇谷おのゝ間牧方おのゝ間牧方おのゝ間牧方の野心被
長尾の道々頃ぬふ。いらで對揚をべんや。是よりて考つふ。我主の為に

汝を遣ふ泉郡を擬え深く堅を高くして粮米を多く蓄め。
然る時待りてこれを攻せ。君より姫を申ひて百姓の時
仁德を施せ。人心ふ附して国必富む。ぬあべ大名の流を
當の軍。一撃の徒。指ざるよ會稽一方大軍とろ必。そ何よ敵將の
心をふ。或ハ同者ぬりちひ。攻撃野戦機よ偽を変ふ麾ぬべ。ゆ積味方よ
ありて國東治平の功只ぬ多くく待んとも。道真仏恵くて大ふ感
悦。されべこまをすで汝と我場よ生きべ止めく城ともせ。我ハ今ろう
汝ふ職をわろ。靜ふ考ぬ書べ。訪号ふろう。仕ふ信べ。忍息
持資ハ家智賜をいたりて。那ひ申せ。とよろ歳ぬ各めて拙笑ぶ才
智人ふ都くぬ知ろゆるよ。遂その報ひふもるべ。そ公ふ脅と授けるも
家也。どれくろ太田方清門佐持資と号。文武の業ぬ勝へ。

一 太田持資武州豊嶋郡に城築く并に江戸の頭に詩文章を縟る
附り河越の城を移す事

斯て後ハ太田持資ハ武備を修めんと先城地をぞ撰ミける。康正二年丙子の春乃頃ハ持資が領分武蔵の国荏原郡品川に館をかまへしが扇が谷へ出仕を遂け。（時に扇が谷ハ修理大夫定正なり持資ハ祖の七男なりしとぞ）江の湖の辺へ来たりし。湊頭ハ舟よ棹しく霞よこめる海原の沖乃帆かけ舟も飛よ網引する蜑の業も。いとおもしろく見えて興ありく所なの眺めまうさん心をあくさある。そや神奈川をうちわたりて品川近くなるところ。河中より魚一ッ船の中へ飛入りく跳ねしけるに。飛りて見えしとも鱗の光東まうりもり。持資ハ魚の船中へ飛ひのり牛。異國本朝ともに吉祥なり。續へこのしろもものへ古き歌ゆも「あづまなる

本しろの名なりき。持資が悦しうれはあらじゆかるらんとてもとめりもへ、まづすなハち九の城なり。時に其ての吉兆なるべ。幸ひ我此地に城郭を築かんと思ひおもひしかりと云ひ。今其才力よ行衛し賽の歸路に至りかくよ不思議のありきろき心願満足の霊験指ゑところなりとく鉄に白旗なくさり顯に筑紫の瑞しありて先近き邊に一城を築んと所々を見巡りに登り給ふ北なる西が谷の前に城地と爲る所ありなく人歩を集め縄張せしが岳の麓狭く叶ハずとひ得ふして止ミぬ（今世此の道灌山ハ昔ふありとされど道灌が縄張せし所を日暮里の在稲付村の有路山静勝寺といへる寺院の地なり。一説に云 此の道灌山ハ国道ありとも云）或日又従卒を連て荏土に来り。彼方此方とうち望しに。一箇の勝地あり。其地形高低所を得方位意に應ずしべ。所の首ハ治し。まづ郷に縄をとりくる地の村名を問ふ。村老答る其くに縄張の中へ千代田宝田の村あり千代田ハ今の吉祥寺是ゆ狭き処の出張所宝田ハ同く

源八幡殿の御願所なりしとや。指賀郡にて國の名に武を藏ふゆゑ。郡の名に豊なる嶋とよめり。民を治ふるゆゑ第一とせり。村の名もおのく因出でたる嶋なりと甚おろかなり。千代田若狭守宗因源八郎を名乗り。石紙畏き事紙集。ち居を帝紀堀を掘て昼夜人まの力を励まし。豊年祝元ありて。長禄元年丁丑三月朔日。經營金〻成就して土木の功を終へ。

今小倉馬町と云る昔の千代田村なりまことに古年ふる村なるゆゑ。

ことに。仕古の眞列侯なるゆゑ。彈家〻〻とや。番町の墨宮を氏と称せるなり。

千代田若狭守の氏名は西野の人にて西野の郷ありて氏をあらむ。

小倉の町ハ千代田稲荷のとゝ云る領なり。古千代田若狭守の物ハ敬て手を觸ず

祠祭〻。湯島の郷ハ湯島の社ゆゑ地へ兎角を建て千代田稲荷と祀

り。此ハ後今の社地へうつ〻。一社ハ捉ひて千代田の社とゝ

こゝとなり。持資公ハ領ひ給ふと。先春ハ東よ。えゝぐりゝうゝ流波根より。烟霞

とゝ云る國府の臺ハ。花の梢も朦朧ゆく。秋ハ露もさき武蔵野の千

草ハ聚く虫の声。冬ハ秋又の山色を愛ず。北ハ牛地市谷〻〻。煉る赤塚

ふ郷より。高低隠〻〻よ連りて弱の盆〻一国を為るゝと。流草川の流ハ源遠

くして海水よ入る。南ハ平地ハ三田原布。品川ハ海潮時よ盈虧

して。竹芝の浦ハ網ゆ。ちの〻〻る嘯声も濱松ゞ枝の風よ聽ひ。眸を坤ハ

遇〻〻長富士の高嶺ハ白雪紀。きゝどゝ〻〻ゝ置ゝるゞ如く。四時の佳景

物ゝて備ハ〻ゞとゝ〻〻ゝ変ふく。百般豊饒ハ魚鼈繁茂しかゝゞ。要

害無双なり。後陽成元之の高聖。神明ハ移潰と視しき無よ為まし。東

國下向の節当城ハ泊まり。其地の形容を称し唐の社の美ゞ

憲合西山千秋雪
門泊東吳萬里船

一ゝ〻ふ自〻吟ゝて〻繁華の大都會と
なるべしとかたるべし持資明細ゝと城中の樊居の室をつくる。
これを靜勝軒と号ゝて〻社ゝ美〻自〻擬ゝて。樓を含雪と名け。亭を
海鮫といふこの頃建長寺の得公長老。靜勝軒の額ゝ詩を題
て持資に贈る。その詩五山の碩學みの〻詩あり。

靜勝軒銘并序

文之所以爲文不亦武之備乎武之所以爲武不亦文之
要乎其要在靜則其備必得勝也竊惟太田左金吾公道灌厥
先迺丹陽人而五十六葉之祖始家相州也公觀武藏豐島
□□之地築城壘從京師建府之命爲其君而割據東土

乙亥騷屑以來二十有餘霜高揚帝旗陣武之五卜子禍
自戲下起公之爺道眞倡將帥屯兵於上陽赤城之麓河
北矣戲下兩岐相分其一者退憑嶮於武之鉢壘公在東
武緩頰慮和兩岐厥舉不能達焉遂守忠孝之至道一怒
着鞭自南馳引將帥渡河而出同於針原酣戰鋒鏑凝血
雷霆扶威公凱歌未休追而開鉢壘壘求救於東兵不日
其兵鳴鼓而相應矣公能量彼我之道息士卒於上陽白
井之南雖不及員戶之攻四面州木無悉非敵兵也當是
時堅守公之符契不祖敵軍者荏土河越二城而已不幾
東兵鼓聲之聲衰鉢壘亦潰矣公以時不可失出白井僅
率數百騎餘凌數万之敵兵直歸東武旌旗增色而後使

將帥建幟於鉢壘公汗馬之勞百戰積功獲萬全者爲天下國家而不爲私□□城於是起本也凡關以西之諸侯望風而靡者往往有之矧關以東之八州大半屬指呼矣城營之中有奠室曰靜勝西爲含雪透貫重重之窻櫺而戶巧鑿經三二尺之圓竅圓竅之中望千萬仞之富士則旦雲暮煙頃刻之隱顯昨陰今晴造次之態度作者結舌畫閣筆西者兌也兌者澤也澤者地之潤和也兌之卦辭曰君子以朋友講習公之德澤弥滔而覃萬物之謂也東爲泊船上下天光一碧万頃并呑數州東者震也震者雷也雷者天之号人々也震之卦辭曰君子恐懼修省公之軍令弥嚴清國家賑士卒之謂也震兌兩扉之名雖小拾遺之辭其義寔係周易矣且夫靜勝二字見于尉繚子和也其詞曰兵以靜勝國以專勝矣施子美之解云兵法欲肅肅則兵得其利將權欲一一則國得其利蕭蕭之馬倣悠之旗此則兵之靜也劉祐攻海鹽也寂若無人楊素破將也馭戎嚴整各以靜而勝也加之范景仁作長嘯詩明騎之賊遂号長嘯公夏夷之間競誦厥名長嘯則文而靜也却胡騎武而勝也公鳴鼓拍肩毫白羽提赤霄新取壁遠駕橋梁則不戰而千里外折衝公平日繫志翰墨法軍旅和氣藹然胸有識鑒神農氏藥方軒轅氏兵書之傳小說來域二十一代集貯數千有餘函而涉獵又家集十一分其類而聚焉号碑玉類題所賦詠贈象人口昔黄

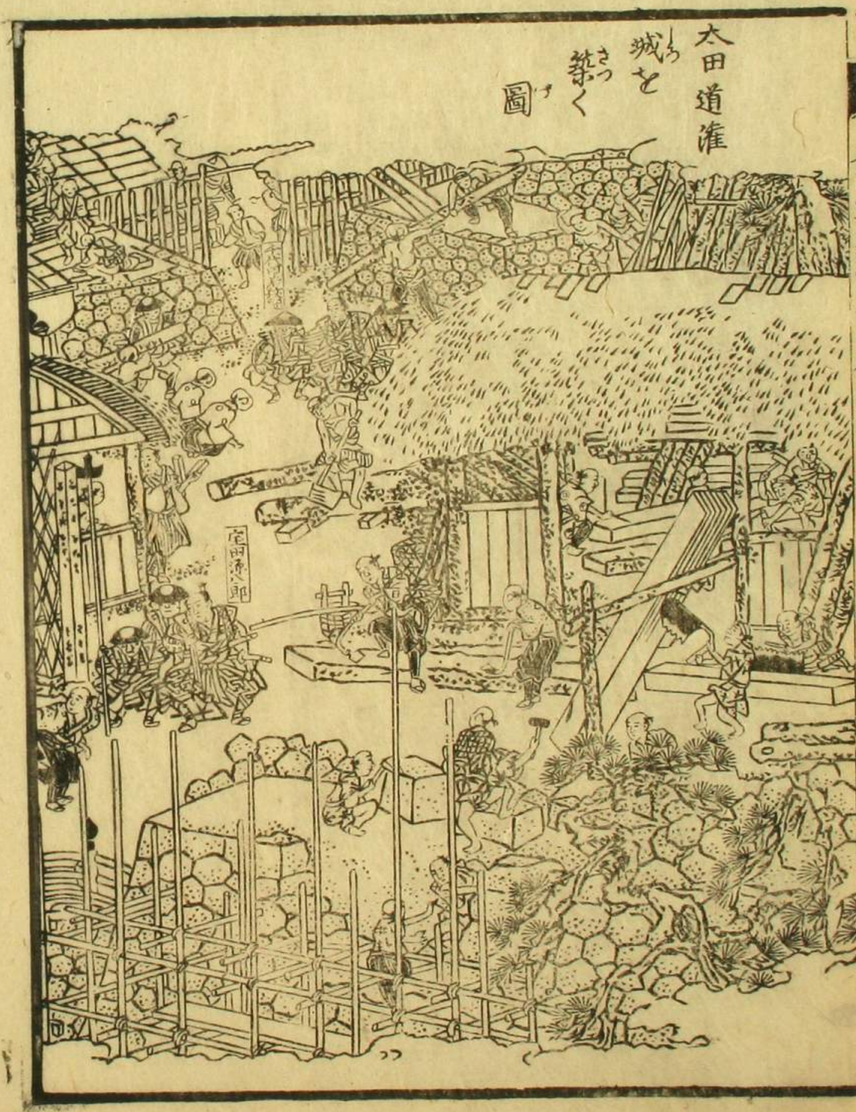
之師揚仁叔以其堂顔静勝趙宋之餘崇亀官至兵侍藏書万巻偏居曰静勝重名節軽官職有文有武百姓歌厥德頗與公合符宜哉公以静勝称軒矣倉廩紅陳富裁粟而雑皂莢市廛交易之樂擔薪而換柳絮僉曰一都會也城中之五六井雖大旱其水無縮其壘營之為形曰子城曰中城曰外城凡三重有二十又五之石門各掛飛橋懸崖千萬仞而下臨無地築弓場毎旦駐幕下士數百人試其弓千分上中下有着甲冑踊躍而射者有祖裼而射者有踏蹐而射者及怠則罰金三百斤命有司貯以為試射之茶資一日之中操戈擊鉦閲士卒兩三回其令甚嚴也予東遊之次駐草驅於東武者連歳公需書静勝之銘厥義不可拒也營中之風致筑波之遠望隅田之晩眺一一載村庵蕭庵二老之叙跋（二老の叙跋新編鎌倉志巻の二）故重不毛舉公要以關左之諸老所作若干首及予一篇同掛壁間與洛社之詩板水月相映可謂千載下之美譚也銘曰

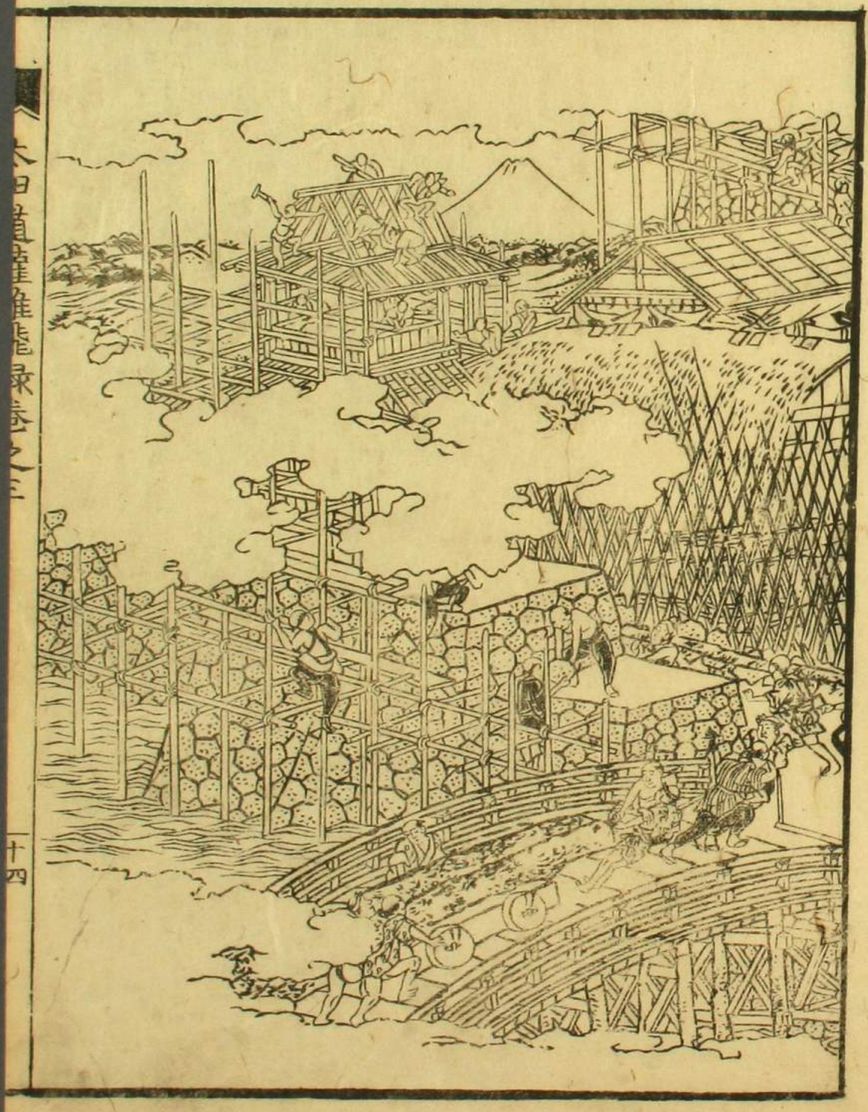
静為天德　維天何言　勝為地勢　維地有源
東呉西嶺　万象一軒　仁者必勇　信況及豚
鐵鑄壘壁　能守弥敦　松茂柏悦　子子孫孫

玉隱

霜鬢歸來定東州　指麾此百萬貔貅
幽軒不出知天下　江碧白鷗千戶侯

竺雲


太田道灌城を築く圖
尾田憲人郎



靜自勝時心自閑　鍾天下秀寸眸間
滄波倒浸士峯雪　一朶芙蓉百億山

萬里

庭宇枝安烏漸眠　遠波送碧數州天
主入窓置博山對　一縷吹殘富士煙

正宗

兵鼓聲中築受降　聞君延客日臨窓
風帆多少載詩去　吹雪士峯晴墮江

龍澤

藉藉威名關以東　又知天下有英雄
鼓聲不起邊城靜　驅使江山入彀中

横川

□□城高不可攀　我公豪氣甲東關

三州富士天邊雪　奴作青油幕下山

靈彦

傳聞靜勝軒中景　四面窻扉一一開
野濶青丘呑帶芥　天晴碧海望蓬萊
高帆似自平無過　漁火如從遠樹來
吾老無期泊船處　閑心西嶺雪成堆

かの小狐狸の。ちくしょうめ。

或日持資擔ふ騰王四方を眺まして。

我が屋敷を打ふつぐ海ちく。富士のうつくしき彩濃めぞうこふ
ちぐさ野のすゑもひとつのみどりうつけるふじの白雪

蓮池の傍。平河の辺に一つの池水あり。ひろく早魃にも涸れず旱すること

を小川の清水といふ。

むさしみの小川の里に絶せぬ岩の根芹をあらひしたとる

と此神社。同年廟谷の定正。其のよみ帝朝良代とき十四歳なりし[illegible]

て。其城地を持資に與へ。持資是に[illegible]。河越の仏波の城を移して縄張を改め

たりしうんとやとより。別て持資に命じて。三芳野の郷ゆゑ要害の

縄張悪く終りて。新に城を築く。日あらずして成就せり。持資城の[illegible]を巨

細に巡見さるに。蓮池の北に[illegible]して結る乃社なり。こは三芳野社大改威

徳天神なり。これを三芳野天神と称せり。いづれの時より此所に結座ゆるる社。

社務神職をよびくに同じといへども。その由緒残れども神社の沿革なりて造り

うふ五本骨の扇を安置せり。寒系の猶もこれ有り。持資[illegible]

再拝し。家臣に向ひ[illegible]。當社の由来[illegible]甚だ[illegible]。

他より何ともいひがたし。今[illegible]の理とりて悪按をめぐらせり。扇の

開く風なり。風大唐に起りて。[illegible]の葉こんぐうの葉[illegible]。敵[illegible]

ひ城に来る敵を追ひちらさんと。[illegible]の系をたちまちとぐいそ神意

を深くいたさんやと祝しうしぶ。[illegible]。[illegible]大門[illegible]六

町がうど。援の亟木を裁て北野の右近の馬場に准へる。[illegible]

[illegible]。[illegible]過ぎるに[illegible]初るとや。在五中将のみうー

野のたのむ乃[illegible]と[illegible]名所あり。乾の方に氷川大明神乃宮あり。土俗

へ業平乃廟なりとなへ誤れり。御神に進雄尊に武乃迦神なり

と神主のやとふより。別に[illegible]一振神馬を奉納し西の方に宇佐八幡の宮

なり。[illegible]糸結して神[illegible]を[illegible]せて。世に[illegible]。平家の

氏神と仏得しゝ實るやと例へ。祈願著て。それへ繁昌あてゆちり。宇佐の縁起ゆへ。此神八田心姫命。滝津姫命。市杵嶋姫命なり。これと三座崇あるゆゑなりて。豊前國ゆ在る所の宇佐宮こゝなり。光孝宗像の社。安芸國嚴嶋の神と。同じ。其後十六代の帝。應神天皇を國殿よ祀りなりて。八幡大神とあらん。山城國男山よ生まれ給ふ。此八幡と称をゝ。八幡宮を元一躰なり。後て宇佐八幡。此八幡と二座あるべきゆゑ。宇佐ゆ御ありし時八宇佐八幡宮と号べ。お資尤し感伏たゝ。樹てゆ

て仙波とゆる。御名仏人の住さ。四院あり。紙。慈覚大師一宇紙建て。星野山無量寺と号。本尊弥陀如来なりしゆゑ。中興尊海和尚なり。北院中院等と始りて。三十四間の塔頭あり。常盤ゆ山王權現の靈社あり。お資殊よ信仰の神なりしゆ。奉幣して神窟ゆ附しそれ

なりの荏土へ移しなりそり。是ゆ以て上杉朝良が城ゆ後を。そ後持資荏土ゆも河越よ移りて。山の上に根現を城の西よ祀る。二芳丸天神を。ゆ河よ移し

文明十年の秋。道灌見て。奏すらりて社を造て。祀られし。八幡宮の天神なり。其地ゆ香月亭なる。又氷川明神ゆ撰して。田安明神を草創を。神田明神八往古より社殿座ゆて。人を。の神も霊験あるゆゑ。常盤堅盤なる祭祀して。神威日々遠く繁昌せり。お資刻く神仏を崇敬能く民を撫育せしゆゑ。扇が谷の勢八朝陽の昇るごとし。荏土河越の二城を始めとして。神社寺観多社城を築き。その外ゆも不ゆ。お資を設け。兵士武備へしゆも。沛然方美びよ山内あゆの防禦の為とぞ。必えなり。

○東常縁京都の命ゆより。下総へ下る。美びゆ馬加落城附り東国の將士ゆ。ゆ降参事

其頃京ゆ義政公の近侍よ。東下野守常縁とゆ人あり。此よ素の世ゆ人の哥道俳諧の人なり。

後に遠藤と
あらためしとぞ。又六千葉常胤が六男。東六郎太夫胤頼が嫡流にて。下総國
東の庄三十三郷を領知し。その家ハ代々京都に在りて勤仕をなしけるに
今度千葉の家二流となり。総州大乱におよびしかバ。いそぎ罷わり一
家の族を催促し。馬加入道を退治しく。実胤を千葉へ移すべき上意にて御
教書を下し。濱式部少輔康利を相具し下総に下向しく。一族國人にね
がひ八國府。大須賀。相馬を始め常縁にお志よせて。多勢を合せて常
縁ハ馬加の城へおし寄せ。嚴しく攻たりしかバ。康胤も出て一日一夜防
ぎまけなかりしども。終にうち負け千葉をさして引退く。代執かへりや怒れ
ければ下総の國に所々群をなしありしを。敵味方合戦せしかバ濱式部少
輔ハ東金乃城に籠め。常縁ハ東の城へぞ籠りける。扨又成氏ハ武田
簗田一色。鳥山などに三百余騎をさし添ヘ康正元年十二月三日武藏國

埼西の城を攻めらる上杉。廳鼻和。長尾。武蔵七黨の者ども籏先を
揃へて切く出し防ぎたゝかひけれバ。烏合蝿集の驅武者ども合戦の
御所方に切られしかバ引退く。同月六日御所方より押よせて手痛く
攻められしかバ。城を攻めおとさず。上杉方数百人討死して敗軍とぞなりに
ける。されども下総の合戦ハ。馬加の入道ハ常縁に毎度打負け。
其千葉中務入道了心が息男。実胤を千葉介と称して。本領を安堵させん
と葛飾郡市川の城に大将ハ籠り。かゝる処に南圖書
助。簗田出羽守その外多勢をさし向け合戦に数度に及び。康正二年
正月十九日終に落城せし。これによりて実胤ハ武州太田鴻郡石濱
落ちられ自胤ハ同郡赤塚へ移る。されバ両総の地ハおほく成氏へ降
参しけれバ。ひとえにありて関東八州互の合戦止む事なくおのづから

修羅の岐とあり行きて農まを耕作紙をとるすあらつぼ。茶田を耳驛と
ぶ嘗けべ仏性疫疫流行し。日く疫くよ俄死をるとの数を知らず
又上総国へ武田信長入道寸入て。麻南の城。望陀郡鶴谷の城を攻る
又ふし又ふ（ふしまた孫とは里谷和泉守武蔵の人ふ勝を近れ臣を務とも云。後より里見を攻為されを長とあるは誤なり）谷上総かとるへ是すり
押領をと。これ不カをるて藥田河内守へ関宿より出勢して氏義のをを
郡紙をを掠奪して市川の城をあるを又上杉の方みても。こ浦分義
同へ三浦より郡りて。相列中郡長尚の城を攻く迫りを奪へ大蔵安
樂斎入道又ふへ作の下をり寸出小田原の城を攻を長を押領を
武蔵国上杉憲信入道性順其の子右馬助房朝とをふ門国へ見入付て出上列
乃味方と引合い武蔵乃深谷を城を攻を。自上古河へ上とを成氏へ
ときを聞とひ〳〵敵上紙をめををドく。同年十月十七日鳥山右系晃

高国情守を魅〳〵く。二百余騎の勢紙ち〳〵遣りを。上杉方も国郡北
原へ出合ひてどを紙事途と挑こたりうへをるをたりて上杉方五井草左
衛門尉久下。利元ををどりを〳〵猛を攻すをを。蒲を御
所方へ一戦を敗を退ひちしを。一方の大将を山右系晃痛を
を被りてその疲を死〳〵をられば。東の陣へ引を。然るを上杉方へを
上原新田の岩松尚純金井新左衛門已下。荒手の者を加へ引べ者
大を勇気代来〳〵。羽継原へ出張して陣をを古河方ことと猛合
合戦をを。どりの軍へ半角なりしが。二度目はをを不利方寸負け。
只を三郎へ引退く。下総をを東岸縁と馬加入道へ〳〵出稲浦
亂と不〳〵をて合戦〳〵。勝敗互ひをなり〳〵。日〳〵敵〳〵のみ合を東の
絶る間もを〳〵。いつ果ぶきとも見えざりを。

○足利政知東國のうち命ぜらるる下向の事

備又京都東山殿をうけ給はりて。東の常家をうけ給はらんため。長禄元年六月廿三日。渋川左馬頭義堯。足利義氏十代九代の探題渋川左近將監義後の二男なり。と云るうして武藏國へさ〜下さる。是は將軍家の家門ゆゑ。九州探題の家なれば。殊更相模滿頼は久〜〜武藏の國司にて。其ゆゑより足立郡蕨といふ所に居城して。今もなほ世の人傾奇せり。則義堯を探題とし。山内の殿の後代武藏。上野の名士多く主簿成氏を追討して。扇谷の殿の如く管領〜〜。關東を治むべき旨を命ぜらるる。扇氏扇谷大和守先達て下向し。所々をもとめ。上杉方の西へ渋川の方へ他家より參會して。多郡より山内殿を乘り奪合戰の用意をなす。太田資清父子の智謀は世に武蔵守相模守の如く。兵糧を蓄へ其備嚴重なり。すなわち義堯は常陸

武藏相模兩國の兵士を召するに下知するとも。東國の者どもは尚も成氏を捨ずして。京都の命を用ひざるべし。如何ゆゑ京都より。將軍家の公達方を一人。關東に下し給へかの。その内下知あらば。靜謐をすべし。諸家より言ひおくる事。命令も從はず。然る所〜〜。義政公の内令身香嚴院殿をもて天龍寺ゆゑ住職あり。長禄元年十二月十九日。二十三歳にて還俗なり。第〜廿左馬頭政知と改め。さ〜日〜〜。上杉中務少輔上使として。同治部少輔改憲南伊豆守。波河の内。布施民部少輔。本戸三河守。孝範。孝能。同廿四日東海道を下向あり。伊豆國三嶋まで來給へ。三嶋大明神へ社參あり。そこにて神事ゆゑ。暫して元服の式なり。加冠は本戸三河守孝範。理髮は上杉治部少輔改憲なり。汁者は冷泉中納言持為卿の門弟ゆゑ。兄弟の寄人なり。是は一首の

和ぢと称し當社へ奉納して。新作刀の作武運を祈る。

我が家のそろえぬひ者、まだ数ふ千代ふるまでのもちゝろ形るもちゝ多

世ゝの同人の作ふも見えそう。彼るよ孫金吏所炎焼の後へ。伯耆所

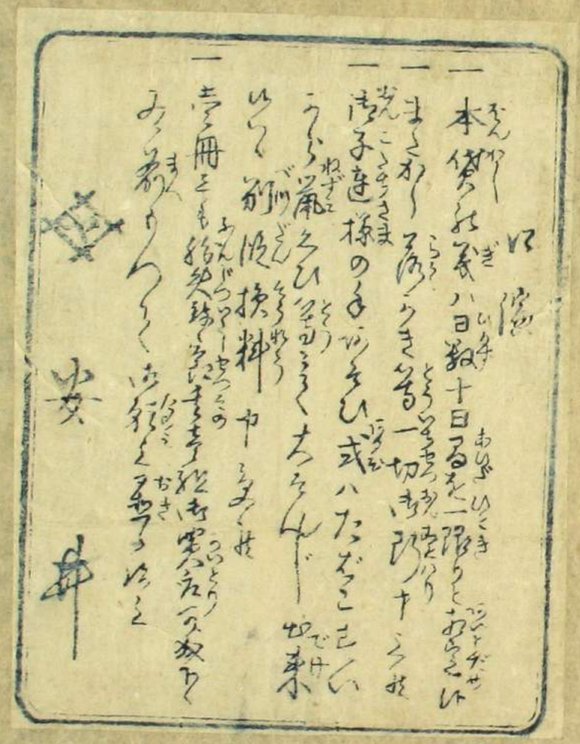
とたう〳〵系〳〵しべき不もあ〳〵。要害もあ〳〵く毒ヤよ敵地も近ちきべ〳〵そ。

伊豆の北條堀越といへ所へ仮よ屋敷を建。伊豆国を領知とう〳〵もるゝも。

先代名代〳〵てよ扶政宮。名相模を誠えく武臣相模より臣の一接をわえ〳〵

て上扶房顕ふ力を合せ〳〵ふ。房顕ハ名ぬる頃より武臣辛ふふ陣を張

て。成氏方の者〳〵日夜の合戦。或ハ小迫合ありて勝敗定ちゝぶ。あるべい

戦ひ今しを除。

大田道灌雄飛録巻之三終